

01173
1
上

一茶句集

上



依智寺社中校

一茶句集

東京 博文館藏版

依智寺

一茶肖像

春甫畧信寫



664

あつち

一茶

まじり

ひき目

まじり

まじり

序



つらな名を就て釋かすは

たつたあつちまじり

まじりあつちまじり

あつちまじりあつち

あつちまじりあつち

今更に
尔を
向方
懐
か
毛

来尔指
尔
下
席
常

しんぶん十んふん
はあかすけるむら
しんぶん十んふん
しんぶん十んふん



一茶發句集上

春之部

えりも左のまんほの屑家式

還曆

新家契

年ちやむれちの石凹むま

蓬茸や唯三又の此代の松

富士画ふ

初春や子代のもろいふ立あふ

古の古の山中ふ幸籠りしと

家もろき清僧の歌なり海の家

三崎の井を柱女松木うかきみ

なりとりのや

美多ののしあき人ふ汲きりり

福まじりや十まじりある信奴

かま獅子の腰をくしひぬ門の松

迹しあやなむ祝う五十尊

初まふ猫も不ニ君る有松の形

待ききききききききききき

小松引く人とそ人松をうむあり

垢所や幕のあふもを伴うしと

天神系

ちさい子の麻上下や梅乃を

梅のあや歌ふや歌まぬ三日の月

梅折や雪とまきとと大なる

相馬覽古

梅の多や平親王の此月夜

梅のや唐土の此月夜

月の梅の影のあんふやくのとき

笠の雪や梅の咲きを吉日と

山雪のうりもや梅の咲きを

梅の咲きを

二歩判の初雪出づり梅乃雪

下戸村やあんふやくの梅の雪

梅の雪を雪とさしん月

そと雪とくやハ昔よ梅の雪

嶋原

入口にわいそふなむく柳北

たの子の梅をく眠る柳の影

げろの雪んとく梅と柳北

水原山

雪も親子はと老や梅乃雪

うらむらひふひてうらむらひく垣根北
湫の柳ふさふさ鳴や小梅村
黄くまふまふふまふまふや組屋敷

松室ふあきよ

うらむらひの籠きふたこのぬ垣根北
黄くまふや 浪をぬくよ 梅のむ
まふたのやうらむらひや 留まふ屋敷
うらむらひやうらむらひやうらむらひの籠

老婆洗衣画

彼の桃う浪もすまふうらむらひ

輕井澤

うらむらひの籠きふたこのぬ垣根北

葉巻とあきよ

此門のまふまふもすまふうらむらひ

栗之六十笑

吉松や又あきようらむらひの籠
うらむらひの籠きふたこのぬ垣根北
誰それとあきようらむらひの籠

西のやちのきりきりきりきりきりきり

小児のあはれあはれ

鳴鶴ふ赤目きりきりきりきりきり

素焼く母ハ十八才歟

門柳や葉のまありけ雪あふ

雪とけや踏らう云走立白子

昔ふあれハあつふとらひや門乃雪

産の雪下りあはれ極あつりきり

つまや杖ききりきりきりきりきり

三日月をさるるさるるさるるさるる

暮入や墓の松風うきうきうき

芽出きりきりきりきりきりきり

店軍笑

福のまゝ門や聖ののり笑ひ

かられ家や猫あつりきりきり

初午

あのをとせあはれぬきりきり

きりきりきりきりきりきりきり

一年を暮るゝ親を思ふのみ

まわりらんか

出代やけの宴ふとも 荷さるるを
物さるやいづくも同一梅の香

二月十日の香ふり

おのころうへ香のふる 淫繁哉

病も起る大冬もく 猫の意

蒲と英の天窓さつ 猫は意

うづれ猫希ぬふ 意もさる

りうげの弦ちんみ 修や小田の唇

板橋

かまや江戸をさる 舟り持

閏二月二十九日とのり 百九

おころぬれハ 船もく 既既

首あけく 是は例の角田

堤ふかふる 車ちあめ

ふれと小敷や 家さる

かりきあつる 上のた

みゆ川のゆりてふ天地は南く
うらめしく田中を新ふそを傳り
こころをこころとて扱をうくと
おのゝ心お心を結とらんこり
御まゆののまおふりしを
まゆふ伏しつゝあてははれを
あつくとそをえんはる

吾も傍や舟をさつんとゆる層

善光寺

開帳おまゆのや 産も親子連
産のまをこのけくしをりの通る
作まのさ梅ふりそと也 親 産
産まのやお作め年の流しり
慈おまのれは薫をそとて産の子
産子ゆめまのふ産をこ子代の松
又産まのまのりゆりや 産 ち産
黒のやトタふくとも産子産産

独坐

世に... 性...
向... 性...
... 性...
... 性...
... 性...
... 性...
... 性...
... 性...
... 性...
... 性...

南都

新記の古本を抄ぬこと多外

吾飯を... 抄ぬ...
撰集の... 抄ぬ...
抄集よ... 抄ぬ...

右 八十五章

魚淵 校 二休

それ... 抄ぬ...
... 抄ぬ...
... 抄ぬ...

奉納

かきく松門丸葉のま 笑ゆり
大葉小葉 笑く入 例くく 花笑ぬ
葉の口や 葉くくくく 東山
傘くくく 箱根 越ひあり 葉のる
春南 新空 笑

安然くく 葉の 笑くく 葉のる

嬉々

まきくや おく おまの 松の 笑
まきくや 葉の 笑くく 角田川

宮の 花の中 七の 笑の 笑
負の 笑の 笑くく 笑の 笑

嬉々

笑くく 笑くく 笑くく 笑くく

水江春色

すの 笑の 笑くく 作くく 笑の 笑
笑くく 笑くく 笑くく 笑くく 笑くく
笑の 笑くく 笑くく 笑くく 笑くく

堪忍をいふなりやふら陰
山の月あはれ人を思ふ

川 萱堂

あの子を地獄からついで親子は
雲のあはれもの生かす果敢に
おれめつりのまゝに旅のまゝと
わが心はわが心
あはれな心はなほなほ
今の世や猶も救ふも花をま

を採らぬものありて
昔の海濱やふらふけは

山下常雨地ふらふ

仏地をいふらふ

世をありとせし

かくあはれうらふ

結縁うらふらふ

生れをいふらふ

隨其の潤を挿ひぬ

らあさうけくきんとき
ちのいりあうけくきんとき
あしんきんいんきんきんきん
みとあうけくきんきんきん
昔とあうけくきんきんきん
きんきんきんきんきん
境界法印必は持あうけく
花柳千條も笑うよ一大事
新吉原

り灯をちやうとてやむの

法所あり

持突う腮をきくしん様うけ
人形ふあつとくきんきん
様へといえんきんきん
きんきんきんきんきん
一本のさうきんきんきん
あうけくきんきんきん
東西の世よあうけくきん

山ふらうのちいさなうまのこはな
廿日ころり

煤くまきと筆子の操の障日此
君う代の大坂喰ふくはくく非
くろく町障ある麻美とあいの
日ころり約一垂るふうれはるり
何れくやぬよひとて聖乃
帯結りのつとまろく独り
しあ母懐ふ五え集とのり

まのく何きハ是寤竟の句
おひあり

小坊まや親の性しては操
操くくと唄をれく香木此
かくま生れておよまらるは
一おまらる操くまらあまらるは

鞆鞆歌

ふくまや操の志をたあう
操科との歌まらる

人門

さくさくのやうにさくさく生れ

天上

かきむじのやさをてんりのは退屈

若八十三章

春耕
稲長校

山

夏之部

下等一夏の空しき夏衣

おりのろのねえ若あり夏衣

と〜と〜ハ片まおひまや〜

〜のひや〜も〜も〜

ま〜〜綿〜ぬ〜

文鹿り〜

おりのけの〜初 袴

中見の心事を能く

夢みのりやとんはるん乃初給
まら日登れ花平一嗅る給

大山詣

日あられ木き力をかほく給
等れあると眠くや一歩法堂
かくまの家や死なせこれのまらうち
夕のけや雀の小籠の夏花持
そらあとのあんとはるこまらま

てよとよもても福おのあこん
通ひ路小階まわりのやう

二十四年業花只一夜夢

若きとけく難集の中を雨の
芥子とけく難集の中を雨の
知の志乃短小名代のりち代
菴の若もくまのあめ
象上へ今もあらん若乃也
乾くも強張る道やあま業

禪寺

福くも掃際をくや木下宮
法徳のふとひひくくまわを
廿のやとくそらけとみ林今た
とみ林と楽さくちもかうた
何のそみ大も林そえぬくも
難ああるるとあう花のた
まゝる若ふ腰うけそ一
まゝる若ふ腰うけそ一

象妙を待るくく一都へ
あまこくそは肘をたか月
ほくくくくくくくくくく
はくくくくくくくくくく
せくくくくくくくくくく
徳西の島若朝人孫うのふ
時を揺あめくもよつくく
知のをもくくくくくく
若佐のほけくくくくかんこ

閑意

昔々の卯月ひまも閑古多

高野山

地獄へハ取らまれとやかんこ香
 ちの世はたれうやこころ果たる
 夢を吐くははきこころの養
 ありやこころハげ敷乃養めてハ
 月出交さハこころの物も管さる
 るの物はまらゆるさるハおとこ

我命をばははきこころの物も管さる
 障なくや物出さるハ福あり
 夢の物やまらゆるさるハおとこ
 物ねたろ空らるハ元ある都らる
 と一果と見さるハ物も平れさる
 空海や初難らるハ物あり
 物ねたろ空らるハ元ある都らる
 夢の物やまらゆるさるハおとこ
 物ねたろ空らるハ元ある都らる
 と一果と見さるハ物も平れさる
 空海や初難らるハ物あり
 物ねたろ空らるハ元ある都らる

邦國を天くく華燄にきり
五月の月の影ふさふさるる 在可部
妙美

五月の月や影もかかれぬ山の穴
粒々皆心苦

わしらのあやを思ふ一と笑田桂唄
子と女や笑ふふうくまの 料の香
梅せつけー子の泣くやまの月
花の心もささるるを思ふ

右 五十八章

呂芳 校
士英

日と懈怠不惜寸陰

わしの日も梅よりさよ 聖も又

わしの影もさよかきぬを思ふ

を思ふれ梅より子の泣くあふれ

初巻はつとそれるる風

不忠也

蒼々や嗚〜ぬる龜ハ後生へ
きね〜ち蒼々〜ハ保田川
夕月や古形ぬ〜く〜はあ
紫の戸や窓の〜りふか〜を
か〜は〜り〜く〜電れ字止の函
あ〜〜ふあ〜懐〜あ〜り〜ぬ〜接〜る
席〜る〜あ〜と〜種〜ん〜と〜ぬれ〜り
夕月や月夜〜る〜け〜糖〜

小室原

母〜る〜あ〜〜と〜吾〜は〜清〜る〜我
人〜事〜〜と〜あ〜れ〜と〜冷〜瓜
旅人や山〜腰〜け〜心〜

無限欲有限命

此風ふ不足〜り〜あ〜り〜夏〜生〜あ
旅〜渡〜を〜り〜〜と〜多〜望〜あ
松影や庭〜ま〜〜と〜千〜両
ふ〜と〜れ〜ハ〜あ〜り〜〜と〜庭〜外
西山や庭〜〜と〜り〜月〜夜

獨樂坊を訪りて院のありしが

三界無安とありしを

堀りけの料も約しとねとてへ

豊年のおりをよきり門の堀

堀一つおてふあむ阿とて仏に

せりうくハハももつとまれ飯の堀

侍ふ堀を返せるはるう那

屋まらうの堀りよむまりはるま

巻の流かきとあつて流乳う那

の〜籠る日和お入山家う那

巻の流それもあつてハハ〜き

堀りけや家家もあつてあつて

堀りけやあつてあつてあつて

堀りけやあつてあつてあつて

新家かゝ

涼〜さや粉のかきぬしり堀

春甫京へ移るを

涼〜ん遠入り〜あつての水

西國橋上

わんわんも法園うまのそ涼船
その常今替へて涼風を
藪村の蟹全馴へて夕涼
魚のや桶ともあつて夕暮
涼しきや涼院成佛のけしき

鱒子みく

新涼やけの雲をくす脊戸の橋

きのこハ鮮魚ふ富へて夕涼

松亭佛

秋涼の笑ひ 細めくありしよね
涼風やちうへて夕涼
きく風も隣の花はあまのり
舟の上の鐘ともあつて夕涼

上総國百首の郷を東浦子
山連り西やうまをて防人の
備へて宛をの地ありとて此夏
陣屋いともむ強張とのめと

其畱の福のゆふかゝりて
 妨ある山家ありて
 聖なる志ぬき
 麻の心も
 人海く憐れ
 りしと志
 めちり
 古の志
 江戸の本所とやんふ人の

髪ゆふりて
 風のそよぐり
 涙を
 吾男
 聖地
 へん
 永く
 と
 と

程ありともお国おハ一挽あり
孝服おあらずとて思ひおあ
けおあよのゆきをいしあき
寢おられすや命断るとも
おハ行りいと多きういせ
見を他のくならぬをうか
中せハ奉行人の意お今ハ
挽おるきよおあくお
のちおあらひきとぬとひ

縋をりしつひおあ
よきく地をりなりぬお
月日の無きおあ
おのあし生と一活あり
おこれる國命をいし
あおきこ力お
あり
月をいし
確水あり



志家の後世にふりかへるる早稲
田の葉おほんと空あけ早稲
迹うらやま又でいふまゝよふ夕立
湖うらやま出現しつゝ雲の早稲
塚の道雲の早稲うらやまの早稲
投也しつゝ早稲の先あり雲の早稲
川野や地蔵の孫の早稲
川野のうらやまの早稲

玉川

萩もそや色あはる浪や夕立
麻の葉おほく借秋書て浪の早稲

右 五十五章

素鏡
文路校

三客集
卷之三
集

